

大会参加記

アーキビストの

情熱とプライドに触れて

秋田県立博物館

畑 中 康 博

はじめに一ようこそ秋田へー

福岡共同公文書館の大場氏に尋ねた。「秋田へは飛行機で来たのですか？」

「秋田新幹線に乗りたくて、羽田まで飛行機で来て、乗り換えたんですよ」「どうでしたか、最新式の新幹線は？」「盛岡から先、民家の中を走ったのには驚きました…」

踏切のある線路、奥羽山脈中の無人信号場での停車、そして車に追い抜かれる低速感覚。

これが秋田への道のりです。第41回大会参加者の皆様、ようこそ。

1 耳に残る言葉

秋田県公文書館の職員として参加した第34回奈良大会での、大阪エルライブラリーの方の発言が忘れられない。「私の館は行政改革により閉鎖の方針が打ち出されました。しかし残念なことに、この方針に府民は反対の声を上げませんでした。閉鎖に身を張って反対する人を普段どれだけ育てているか、これが施設存廃の分かれ目になります。大事なことは日頃の取り組みです」

この言葉を聞いて以来、私は利用者の拡大と館を親身になって支えてくれる人の育成を考えるようになった。現在私は博物館に勤めているが、昨年度から古文書整理ボランティアの活動を開始した。全史料協の大会に参加しなければ、この取り組みの必要性を真剣に考

えなかったかもしれない。大会は学びの場である。

2 国立公文書館の出張共催展の話

1日目の研修では国立公文書館依田健氏による「公文書管理法の下での国の取り組み等について」に参加した。そこで、国立公文書館が地方の公文書館等との共催で展示を開催しているとの話を聞いた。このことについては、衆議院議員上川陽子氏による記念講演「公文書管理、そして公文書館への思いと期待」においても、これからの国立公文書館は、子ども達のための学びの場として展示・学習機能の充実を図り、地域の公文書館とネットワークを構築していくとの話があった。

東京へ行かなければ見られない貴重な史料を、地方でも見せることができる…かもしれない。新たな展示の可能性に夢が膨らむ。

3 2日目は

嶋田典人・山本太郎両氏による「[[委員会報告]調査・研究委員会の今期の調査活動について」に参加した。散逸・滅失の危機にある学校アーカイブズの保存・活用へ向けて各館の取り組みを調査すること。どのようなアンケート結果が出るのか楽しみだ。

続いて大会テーマ研究会。高橋一倫氏による秋田県大仙市、高村恵美氏による茨城県常陸大宮市、田村光規・須崎幸夫両氏による群馬県中之条町の報告を聞いた。三者の報告で印象に残ったことを列挙すると次の通りになる。

①高橋氏は、大仙市で公文書館が開館する運びとなったのは、能率的で質の高い行政と人口減少社会の中で地域の記憶と記録を守る



交流会風景 1



交流会風景 2

ことを考えあわせた結果であるという。

しかしその陰には、地域住民が何度も「公文書館が必要である」との声を市長に請願し、それを受けて市役所側も情熱をもって取り組んだことも忘れてはならない。

②常陸大宮市文書館は、廃校を活用して開館した館とのこと。ややもすると、子ども達が通いやすい学校は、鉄道沿線から離れた場所に位置することが多いが、同館も駅から遠いという。私は高村氏に、利用者が通いにくい立地にある館の企業努力を尋ねると「丁寧なレファレンスを行う」との答えが返ってきた。やはり、利用者一人を大切に作る姿勢こそ基本であらねばならない。

③中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」ではカフェを開いているとのこと。話を聞いた途端、委託か直営か？メニューと売上げについて話を聞きたいと思った。休憩時間中に須崎氏に伺うと、館職員が資格を取ってコーヒーを入れる、メニューはアイスとホットのみ、音声ガイドとセット割引券で年間1万9,000杯を売っているとのことだった。文書管理の仕事をし、展示をし、そしてコーヒーをいれる。これには驚いた。

4 情報交換会

懇親会における小松芳郎氏の「これは単なる親睦会や慰労会ではない。情報交換会だ」の挨拶どおり、嶋田氏（香川県立文書館）、

大場氏・奈須氏（福岡共同公文書館）、針谷氏（別府大）、高橋氏（大仙市役所）と話をしているときに聞いた針谷氏の言葉が忘れられない。

「選挙権が18歳に引き下げられることは、アーカイブズが学校教育に入り込む絶好の機会である。歴史資料を使って、投票の重要性、政治に参加する意識を高校生に訴えていくんだ。学校の先生が二の足を踏むことを私たちがやるんだ」

これを聞いた嶋田氏、やおら手帳を取り出しメモし始める。そして一言。「たまには、いいこと言いますね」嶋田氏の「たまには」から、豊予海峡を挟んだ二人に、アーカイブズに関する何らかの意見の隔たりがあることは想像できた。やはり全史料協全国大会は、朝から深夜まで、耳に入る言葉一言一言が勉強になる。

おわりに

私は大会開催地の大仙市に暮らしている。東北初の市町村立の公文書館が間もなくこの地にできる。施設の開館予定は平成29年5月。秋田の5月は、緑が萌えたち、生命の躍動を感じる季節である。

開館セレモニーの参加者は、透き通る青空と雲の影が映る一面の水張田を眺めながら公文書館への道に行くことになるでしょう。皆様の来秋を心からお待ちしております。